

IAMAS が居るダス!! -思い出横丁情報科学芸術アカデミーの活動からみる IAMAS の〈これまで〉と〈これから〉 -

OAMAS and IAMAS -Past and Future of IAMAS throughout the history of OAMAS-

谷口暁彦 渡邊朋也（思い出横丁情報科学芸術アカデミー）

TANIGUCHI Akihiko, WATANABE Tomoya (OAMAS)

1. はじめに

情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] のみなさんこんにちは。メディアアート界のクラッシュギャルズ¹こと、思い出横丁情報科学芸術アカデミー [OAMAS] のたにぐち・わたなべです。このたびは、我々がかつて IAMAS に併設されていたもう 1 つの IAMAS—岐阜県立国際情報科学芸術アカデミーと同じ〈情報科学芸術アカデミー〉という看板を掲げているという誼から、豪華執筆陣の末席に加えさせていただき運びとなりました。長い歴史を持つ IAMAS と比較すると、我々などはまだまだ飯事レベルではありますが、我々の活動を振り返ってみると、IAMAS との少なくない接点から、多くの影響を受けていることが分かりました。ここではそうした接点をいくつか取り上げながら、IAMAS の〈これまで〉と〈これから〉について考えていきたいと思います。

2. 思い出横丁情報科学芸術アカデミーとは

最初に我々のことを簡単に紹介しておきましょう。思い出横丁情報科学芸術アカデミーとは、コンピューターや映像などを用いた芸術表現について思索を巡らせ、それを実践に移す〈場〉です。名前からも分かる通り、東京の新宿駅西口付近にある「思い出横丁」という、居酒屋などの飲食店が密集する商店街を拠点に活動をおこなっています。もともとは、デザイン系ポータルサイト「CBCNET²」の人気コーナー「Dots & Lines³」で、2010 年 3 月からスタートした連載「たにぐち・わたなべの思い出横丁情報科学芸術アカデミー⁴」をきっかけに発足したものであり、この連載では学校での学びという体裁で毎回「幽霊をつくる」などのテーマを設定し、それに沿った思索と作品の制作を誌面上で展開しています。

その後、この連載を契機に我々の人気に火が付き、さまざまな活動を展開するようになります。代表的なところでは東京にあるメディアアートに特化した美術館、NTT インターコミュニケーション・センター [ICC] 内に発足した研究グループ「インターネット・リアリテ

¹ 1980 年代に活躍した女子プロレスラーのタッグチーム。当時全日本女子プロレス（全女）に所属していた長与千種とライオネル飛鳥によって結成。必殺技は二人同時にサソリ固めを極める「W サソリ固め」などがある。ダンブ松本率いる極悪同盟と死闘を繰り広げ、80 年代の女子プロレスブームを巻き起こす。

² <http://www.cbc-net.com>

³ <http://www.cbc-net.com/dots/>

⁴ http://www.cbc-net.com/dots/taniguchi_watanabe/

ィ研究会⁵」があります。これは、2011 年 7 月に開催された座談会「インターネット・リアリティとは？」をきっかけに発足したグループで、研究会のメンバーは我々のほかに、エキソニモ（千房けん輔＋赤岩やえ）、CBCNET の栗田洋介氏、デザイナー／プログラマーの萩原俊矢氏、インターフェース論研究者の水野勝仁氏の計 7 名。インターネットに常時接続している環境下で生活するようになった我々の新しいリアリティと、そこでのアートのあり方を捉えるべく展覧会の企画と多くの座談会をおこない、について議論を重ね、現在も活動を続けています。

3. IAMAS との出会い

こうした活動をしているものですから、街を歩いているとよく「IAMAS の OB なんですか？」などと話しかけられます。そういう時はにっこりと静かに微笑むのが我々の数少ない校則のひとつなのですが、実のところ、我々はいずれも IAMAS を卒業していなければ、そもそも入学したこともありません。それなのに、このような看板を掲げて公共施設のイベントに参加して、謝金を得るのはいかなものか—そうした暗黙のプレッシャーを今ひしひしと感じています。なぜ我々は「思い出横丁情報科学芸術アカデミー」という、IAMAS を彷彿とさせるような名前を名乗っているのでしょうか？「ローマは一日にして成らず⁶」という諺があるように、我々も突然〈情報科学芸術アカデミー〉を持ちだしたのではありません。むしろ、長い年月をかけてそうせざるを得ない状況に追い込まれていたのです。

話はインターネット博覧会⁷、通称「インパク」の爪あとが生々しく残る 2000 年代初頭まで遡ります。当時はまだ iPad のようなタブレット端末は登場しておらず、漬け物石としても使えてしまうほどの重さを誇るパーソナルコンピューターを使って計算していましたし、iPhone のようなスマートな電話機も無いので、呪文を唱えたら変身できそうな二つ折りの電話機を使って他者とのコミュニケーションを取っていました。さらには、iPod でいつでもどこでも音楽を聞くことが出来ないのも、好きなミュージシャンのモノマネをしたり、インターネットがそれほど普及していないので、瓶に手紙を入れて海に投げて連絡したりもしていました。こうしたほとんど悲慘と言って良いメディア環境の中、たにぐちとわたなべは偏差値が低い代わりに学費は高いことで知られる東京都内のとある総合美術大学のメディアアートを学ぶ専攻で出会います。この専攻こそが、我々と IAMAS との最初の接点なのです。

多摩美術大学情報デザイン学科情報芸術コースは、IAMAS の開学から遅れること 2 年、1998 年に設置された専攻です。00 年代に入って、日本各地にメディアアートを学べる大学が続々と出現したことを考えると、いまや老舗のひとつに数えられるでしょうが、我々が入学した当時はまだようやく卒業生を送り出したばかりの状況で、先ほど例示したメディア環境のことも考えると、明るい未来を描けそうな気配は微塵もありませんでした。そんな混沌とした暗闇に光をもたらしてくださったのが、IAMAS を卒業した後、社会で活躍しながら情

⁵ http://www.ntticc.or.jp/Exhibition/2012/Internet_Reality/index_j.html

⁶ 大きなことを成し遂げるには時間がかかるという意味の諺だが、IAMAS が存在する大垣市には、豊臣秀吉が一晩で築城したと言われる「墨俣の一夜城」があることから分かる通り、どれくらいの時間がかかるのかは人それぞれである。

⁷ 当時経済企画庁長官だった堺屋太一の発案により、日本政府のミレニアム記念事業の一環、経済振興として 2000 年 12 月 31 日から 1 年間行われたインターネット上の博覧会。多額の税金が投入されたが、たいした盛り上がりも経済効果も得られなかった。インパク編集長の 1 人であった荒俣宏は、同年 5 月に行われた「インパク 150 日決起大会」において「つまらないものを作る権利もある」「自分にとってタイタニックも 3 分の 2 はつまらなかった。しかしインパクはあと 200 日もある」とコメントしている。

報芸術コースで非常勤講師として教鞭を取られていた音楽家の山路敦司氏やアーティストのクワクボリョウタ氏ら⁸だったのです。山路氏は2年次から、クワクボ氏は4年次から⁹卒業制作に至るまで指導いただき、その教えはいまでも胸に焼き付いております。ほかにも、客員教授に坂根巖夫氏、研究室のスタッフに石原次郎氏らの卒業生がおり、我々はそうしたIAMASの関係者に囲まれながら研鑽を重ねてきたのです。

4. 大学間コンソーシアム事業

そして大学生活も終わりに差し掛かってきた頃、愛知万博、通称「愛・地球博」の爪あとが生々しく残る2005年から2006年にかけて、より直接的にIAMASと接点を持つことになります。それが、先述のICCと、山口県にあるアートセンター、山口情報芸術センター[YCAM]がそれぞれ個別に展開した「コンソーシアム」と呼ばれる事業です。この事業は、ICCとYCAMで互いに方向性や成果物は異なるものの、いずれもメディアアートや、それに関連する領域を研究するいくつかの大学でコンソーシアム＝協議会を形成し、大学の枠組みを超えて学生が自主的にプロジェクトを実施するという、今思えばかなり特殊な試みでした。多摩美術大学からはわたなべがICCの、たにぐちがYCAMのコンソーシアム事業に参加しており、それぞれの事業でIAMASの学生と協働をしています。

5. Lib-LIVE!

ICCでのコンソーシアム事業は「Lib-LIVE!」という名称で、2005年11月から12月にかけて、企画展「アート&テクノロジーの過去と未来」の関連イベントとして開催されました¹⁰。参加大学は東京藝術大学、多摩美術大学、武蔵野美術大学、東京造形大学、IAMASの5校。当時ICCのキュレーターを務めていた四方幸子氏がホストとなり、各学校から派遣された学生たちによるプロジェクトチームが結成されました。メンバーは以下の通り（敬称略）。

小町谷圭（東京藝術大学大学院2年＝当時28歳）

小柳淳嗣（武蔵野美術大学大学院2年＝当時24歳）

中村崇之（東京造形大学4年＝当時23歳）

廣田ふみ（情報科学芸術大学院大学[IAMAS]1年＝当時23歳）

渡邊朋也（多摩美術大学4年＝当時21歳）

このプロジェクトは、「生きた（Live）ライブラリ（Library）」をテーマにした、ワークインプログレス形式のアーカイブシステムを構築するというもので、大きく2つのプログラムから構成されていました。ひとつは、アーティストや批評家たちに「学生が読むべき／学生時代に影響を受けた書籍」について尋ねたインタビュー集と、その書籍そのものです。ICCの入り口付近のパブリックスペースに書籍を収めた書棚と閲覧用のテーブルを設置。利用者が任意の書籍をテーブルに持って行くと、テーブルの天板にそれに対応したインタビュー映像が投影され、それを視聴しながら、書籍を閲覧することができるというものです。20名以上のアーティストや批評家たちにインタビューをおこなっており、その中には、プログラマ

⁸ 当時の多摩美術大学情報デザイン学科情報芸術コースは、3つのスタジオに分かれており、我々が所属している「数と知覚のインターフェース」スタジオとは別の「写真と映像」スタジオでは、現ライゾマティクスの石橋素氏が非常勤講師として教鞭を取っていた。

⁹ 当時のクワクボ氏は、さらにまた別のスタジオ「エレクトロニクス・アート」スタジオで2～3年生を指導しており、2～3年次の我々はたまたま巡り合わせが悪くクワクボ氏に指導されていない。

¹⁰ http://www.nttice.or.jp/Archive/2005/PossibleFutures/Lib-LIVE/index_j.html

一の松本典子氏、音楽家の鈴木英倫子（すずえり）氏、クワクボリョウタ氏など、IAMAS の卒業生も多数含まれています。こうしたインタビューと紐付けられた書籍が 50 冊ほど集まる小さな図書館、それが Lib-LIVE!の大きな核となっていました。

もうひとつのプログラムは、この図書館付近でおこなわれたライブパフォーマンスなどのイベントです。とくにライブパフォーマンスでは、各大学の OB を中心に、ICC ではまだ取り上げられていなかった比較的若い世代のアーティスト／音楽家を招聘しました。ここにはすずえり氏のほか、The Breadboard Band、堀井哲史氏などの IAMAS の卒業生が参加しています。こうしたライブパフォーマンスも先述のアーカイブシステムのコンテンツに組み込まれ、成長する、生きたライブラリとして展開していきました。

こうしたプロジェクトに至った背景には、参加したメンバーの多くがライブイベントを企画したり、ウェブマガジンや雑誌などを運営しており、コミュニティにおけるハブのような役割を持っていたことが挙げられます。Lib-LIVE!には、個々のハブ的機能を「アーカイブ」を依り代に直結させることで、ひとつの大きなコミュニティのようなものを創出する狙いがありました。会期終了と同時に Lib-LIVE!は事実上活動を停止し、その名の通りに〈生き〉続けることは叶いませんでした。ここで生まれたコミュニティはその後の思い出横丁情報科学芸術アカデミーの大きな支えとなっています。

6. 公共空間とサウンド “autonomic sound sphere - 自鳴する空間”

YCAM で行われたコンソーシアム「公共空間とサウンド “autonomic sound sphere - 自鳴する空間”」は 2006 年 6 月から 8 月にかけて、「マッピング・サウンド・インスタレーション」という企画の一環として開催されました¹¹。参加大学は東京藝術大学、多摩美術大学、山口大学、IAMAS の 4 校。各学校から派遣された学生たちによるプロジェクトチームが結成されました。メンバーは以下の通り（敬称略）。

須藤崇規（東京藝術大学大学院 1 年＝当時 23 歳）

谷口暁彦（多摩美術大学大学院 1 年＝当時 23 歳）

林洋介（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 1 年＝当時 24 歳）

森川岳彦（山口大学大学院 1 年＝当時 23 歳）

このプロジェクトは、ワークインプログレス形式のプロジェクトである Lib-LIVE!に対して、「公共空間とサウンド」というテーマのもと、ひとつの作品をチームでつくり上げるというものでした。最終的には、YCAM の館内の様々な場所にマイクとスピーカーを設置し、各エリアの環境音がフィードバックしながら、最終的に中庭に集まり、その上空へと排出されるという、YCAM そのものを生命体として捉えたインタラクティブサウンドアート作品を制作し、音楽家の渋谷慶一郎氏と複雑系科学研究者の池上高志氏のインスタレーション作品「filmachine」と同時に公開しました。

作品の制作にあたっては何日も寝食をともにしながら制作を行っていく日々だったのですが、林さんのクレバーさと、Max などのオーディオプログラミングの能力に何度も助けられた事が強く記憶に残っています。また、YCAM に設置されたテクニカルチーム YCAM InterLab のスタッフたちの多大な協力と支援によってプロジェクトを完成させることが出来たのですが、当時の YCAM スタッフの多くが IAMAS の OB だったのです。この時に、彼ら

¹¹ http://msi.ycam.jp/work_a.html

のもつ豊富な知識と高い技術力に裏打ちされたメディアへの深い眼差しに感心したとともに、そういった眼差しのあり方が実際のメディアアート作品の制作の現場においてとても重要なものであることを、身をもって理解したのです。

7. 学生を通じて見える IAMAS の風景

コンソーシアム事業を通じて、2名の IAMAS の学生と協働したことは、刺激的な体験であるとともに、IAMAS を卒業された先生たちに指導いただくのとは、また違ったかたちではっきりと IAMAS の学びの特色のようなものを垣間見ることができました。我々の母校と比較しながらいくつか例示してみましょう。

まず、IAMAS に通う人々のバックグラウンドの多様さ。我々が通っていた大学ではどうしても学部での教育に重きが置かれているため、他の大学と同様に社会人を経て学生になった人などはほぼ皆無で、同級生は我々と同世代の、社会経験ゼロでプライドの高い連中しかいませんでした。それに比べて、IAMAS には、我々の同世代以外にも、エンジニアやミュージシャン、アーティストなどを経て、改めて学びの場に飛び込んできた極めてモチベーションが高い学生が数多く見受けられました。このことは、そうした IAMAS 以前の経験と IAMAS での学びとの相乗効果が生み出しており、質の高い成果にもつながっていると思います。

つぎに、少人数教育によるきめ細かい指導。我々が通っていた大学は高い学費を払っているにも関わらず、専任教員ひとりあたりの学生数が多く、それゆえ基本的に放任に近い教育方針が取られていました。その結果、やる気のある者と無い者との間で、成果のクオリティに大変激しい差が付く傾向にあり、さらにクオリティの低いものの方が多数を占めるという有り様でした。その点、IAMAS は大学院大学ということで教員の指導が行き届いているのか、作品制作に必要な技術的スキルのレベル、プロジェクトの運営にあたって必要なディレクションスキルのレベルの平均値が極めて高いように感じられ、事実、コンソーシアム事業で IAMAS の学生に助けられた場面は多々ありました。

そして、横＝同級生のつながりと縦＝学年間のつながり。我々は5期生ということで、後輩は多いものの、先輩はあまりおらず、いても落伍者ばかりという状態で、また同級生も70人以上いるため、非常に共有できる思い出も乏しい、全員が砂粒のような存在です。それに引き換え、IAMAS の OB たちは、縦も横もつながりが強い。それは少人数教育、大垣という学業に集中するのに適した地域、そして「ロフト」と呼ばれる集会所と学習環境を兼ねた空間を持つ学び舎がそうさせるのではないかと思います。こうしたつながりの強さによる恩恵は特に多くの人々の参加を必要とする Lib-LIVE! では痛感しましたし、IAMAS を卒業された人々が相互に助けあう様を見てうらやましく感じたものです。

こうした IAMAS の良さというのは、あくまで氷山の一角ではありますが、学生を通じて見えてきた IAMAS の〈風景〉が、後の我々の大学での学びにも敷衍されていきました。

8. IAMAS へのオマージュ

このように IAMAS から多大な影響を受けてきた我々が、CBCNET からいわゆるメディアアートについての連載を打診されたとき、IAMAS からの影響を自分たちなりに解釈し、広めていく使命感を感じたのは必然でした。しかし、それをそのまま書き連ねるのでは意味が無い。テキストの外部に、IAMAS のような形式を導入しなくては、本質がスポイルされてしまうのではないかと。そうした思いから導入したのが、思い出横丁という装置なのです。

ノマディックに様々な年齢、国籍、職業の人々が出入りし、肩と肩を寄せ合い、見ず知らずの他人であっても、やがて仲良く話を弾ませあってしまう思い出横丁。それは、我々がかつて IAMAS に感じた〈風景〉が凝縮されたものと言えます。ここに教える側と教わる側が緊張関係を維持しながら、時にそれが転倒してしまうような、流動的な関係性を生み出し、思索と実践を展開していくことで、我々の受けてきた影響を読者に追体験させるようにして還元する、それが思い出横丁情報科学芸術アカデミーの基本的なシステムです。

ですので、この「思い出横丁情報科学芸術アカデミー」という名称は、連載の構想の最初期段階から内定していました。しかし、我々が抱えるオマージュを理解されないがために、法廷闘争に至る可能性も否定出来ないことから、コンソーシアム事業で苦楽をともにした IAMAS の 2 人の OB に相談したところ、快諾を得られたため、「思い出横丁情報科学芸術アカデミー」という名称で連載がスタートしたのです。

その後は、2012 年 3 月に我々のオマージュの対象の一角を担っていた、アカデミーの方の IAMAS が廃止されるというショッキングな出来事もありましたが、IAMAS の教えを胸により一層の活動に励んできました。結果、2014 年 2 月には、これまでの業績が評価され、IAMAS の修了研究発表会に招聘されるまでになりました。ここまで来れば、我々も IAMAS の卒業生を名乗ってもいよいよ大丈夫なのではないか、確信に近い感情がこみ上げています。

9. IAMAS のこれから

2014 年 4 月から、IAMAS はこれまでキャンパスを置いていた領家町を離れ、ソフトピアジャパン地区へと移転すると聞きました。今後の IAMAS はどうなるのでしょうか。我々が IAMAS の知に触れてきた経緯とその事実を重ねあわせると、IAMAS のひとつの可能性が浮かび上がってきます。

それは、どこでも IAMAS になりうるという可能性です。思い出してください。我々はこれまで様々な場所で IAMAS の学生や IAMAS の卒業生に出会い、その度に彼らの持つ知識や技術に驚かされ、それを自らの活動の糧としてきました。それは、実際に領家町の IAMAS に学生として通学し、授業を履修するのとは異なる在り方ではありますが、つまり我々の周りに遍在する IAMAS に接し、学んできたと言い換えることもできるでしょう。

「IAMAS」という 5 文字がかつて内包していた「アカデミー」は、古代ギリシャの哲学者プラトンが開設した学校「アカデメイア」に由来します。しかし、このアカデメイアとは、学校があった地名に過ぎません。しかし、その後そこから巣立った人々たちの手によって、あるいはアカデメイアにあやかるかたちで、アカデメイアのような高度な教育機関が各地でも開設されるようになり、それらにも「アカデメイア」にちなんだ語が冠されるようになったのです。つまり、アカデミーとは本来的にはポータブルな存在なのです。

IAMAS はこれまでに多くの優秀な卒業生を輩出してきました。また、これからもそうでしょう。そして、IAMAS を巣立った彼らが世界中で誰かと仕事をした時、何かを教えた時、さらには酒を飲み交わして議論する時、そこに生まれる特殊な〈場〉。それは何人たりとも私有できるものではありません。岐阜県であっても、です。IAMAS は今回の移転を契機に、そうしたコモンズまたはアジールとしての〈場〉こそが、むしろ IAMAS なのだと思え返し、ソフトピア地区にその存在を固定するのではなく、さまざまな状態で遍在させるような試みをこれまで以上に徹底していただきたい―現存する最古の情報科学芸術アカデミーとして、そして一介の卒業生として我々はそのように思うのです。